

むかし、あるところに、男とおかみさんがいました。子どもがないので、毎日、毘沙門さまに、子どもを授けてくださいと、一心にお参りしていました。

あるとき、おかみさんのお腹が大きくなりました。さあ、子どもができると、男とおかみさんは楽しみにしていました。ところが、十月たつても子どもは生まれません。心配しているうちに、ようやく男の子が生まれました。おもちゃのような小さい子どもでした。男とおかみさんは、

「小さくても、これは毘沙門さまの授かりもんじや」とよろこびました。小さくてもお乳が飲めないのです、鳥の羽に蜜を付けてなめさせて育てました。子どもは、じきに、蚊の鳴くような声で話ができるようになりました。そこで、ご飯粒をひとつぶひとつぶ食べて、かわいがって育てました。

ある日、男の子は、

「おれに、ぬい針を一本おくれ」といって、ぬい針をもらおうと、わらを鞘にして腰にさし、

「おれ、鬼ヶ島に行つて来る。もしおれが帰らないときは、きようが命日と思つて祭つてくれ」といって、出て行きました。

川まで来ると、男の子は、おわんに乗つて川を流れて行きました。どこまでもどこまでも流れて行くと、鬼ヶ島に着きました。

男の子は、鬼の屋敷まで行つて、履物の下から、

「ごめんください。ごめんください」と声をかけました。すると、鬼たちが出て来て、

「人くさい、人くさい」といって、そこらじゅうさがしました。そして、やつこのことで、高下駄の下にいる男の子を見つけました。

「やあ、かえるみたいに小さいやつがいる」

鬼たちはそういつて、男の子をつまみ上げました。そして、

「ひと口で食べてやろう」といって、男の子を口の中に放りこみました。

男の子は、鬼のお腹の中で、針の刀をぬいて、そこいらじゅうを、どこそこ、どこそこ、つきました。鬼は、苦しがつて、

「こりや、南天の葉を食うて、はきださにやらん」といって、南天の葉を食べました。

男の子は、鬼の口から飛び出しました。ふと見ると、側に、打ち出の小づちがあつたので、

「これで、一人前になれるかな」と思つて、小づちで自分の頭を、がつくんがつくん打つてみました。男の子は、たちまち背が伸びて、りっぱな若者になりました。それを見た鬼たちは、

「わああ。化けもんだあ」と、びつくりして逃げて行つてしまいました。

側にかくれ蓑もあつたので、男の子は、打ち出の小づちとかくれ蓑を船に積んで帰つて行きました。

家に帰ると、男もおかみさんも、

「うちの子は、そんなに大きくなかったが」といいました。男の子は、鬼を退治して、打ち出の小づちのおかげで大きくなったことを話しました。おかみさんは、

「ゆめじゃないか」といって、男の子のあっちの手、こっちの手をつねってみて、よろこびました。

男の子は、毘沙門堂を立てて、かくれ蓑をお供えしました。それから、打ち出の小づちで、お米やら着物やら、お金やらを出しました。そして、嫁さんをもらって、みんなでいい暮らしをしたということです。

おしまい

原話…『塩吹き白―宮崎の昔話』比江島重孝／桜楓社
再話…村上郁